

IPU・36

けんだい、
だいすき。



来年度は、いよいよ開学10周年です。
メモリアルイヤーを飾り、県大10周年のPRモデルを務めることになったのが「IPU-Festa-Model」の尾無徹さん＝看護学部2年、佐藤文美さん＝総合政策学部3年。
深い教養と専門性を求めて勉強に打ち込める環境、そしてサークル活動や行事などを通して集う人の絆が広がっていく。こうした点に実り多きキャンパスライフを感じ取っている2人です。



キャンパス彩 小雪の候、クローバー

水っぼい、初冬の雪にクローバーが隠されそうでした。グラウンドの脇で眺める岩手山は、すっかり冬の佇まい。

ひと恵むキャンパス

研究・課外活動で顕著な実績を挙げたり、社会への貢献度を深めたりした個人・団体を称える「平成19年度・学長特別賞」の受賞者です。



- 峯村 惇 [ソフトウェア情報学部] 第69回・情報処理学会全国大会にて、教育システムに関するセッションで学生奨励賞。
- 越後 博之 [ソフトウェア情報学研究科・博士前期課程] さまざまな学会での受賞、論文誌への採録などが多く、きわめて顕著な研究業績を残した。
- 及川 ひとみ [ソフトウェア情報学研究科・博士前期課程] マルチメディア系の大規模な国内シンポジウムで、優秀プレゼンテーション賞を得た。
- 中井 優志 [ソフトウェア情報学研究科・博士前期課程] 国内外の学会で論文を発表。学会誌への論文採録も含め、すぐれた研究実績を挙げた。
- 高橋 勤 [ソフトウェア情報学研究科・博士前期課程] 第30回・日本脳神経CI学会での発表が最高得点を得て、機関紙「CI研究」に掲載。
- 卓球部 [代表/千葉 詩織] 平成19年度の東北学生卓球連盟・春期リーグ戦(二部リーグ・女子の部)で優勝した。
- ピアいぶ [代表/佐々木 和] 中学・高校でのピアカウンセリング活動ほか、他団体との協働で岩手の思春期保健に貢献。
- 地域貢献サークル 風土熱人R [代表/浅石 裕司] 新潟県中越沖地震の被災地でボランティア活動を実施、復興への支援を多面的に行った。
- さんさ踊り実行委員会 [代表/藤村 友紀] 盛岡の夏を盛り上げるイベントに開学から欠かさず、参加。関連行事にも取り組んできた。



IPU Festa 通信③

2008年へ始動せよ。

初日は雨がパラついて肌寒かったけど、翌日は、胸が躍るような大学祭日和だった。「あなたが主役」とメッセージを放ち、大盛り上がりだった2日間(10月27・28日)。
ご来場の皆様、本当に、ありがとうございました。
環境に関する自主ゼミ「Grish」には、ことしもゴミ回収やリユース食器の活用で、お世話になりました。モールに軒を並べ、元気と美味しさを届けてくれた模擬店のスタッフ、みんなの笑顔と輝きを忘れません。裏方に徹した実行委員会の面々も、よくぞ緊張の糸を切らず、それぞれの役割を果たしたと思う。
弾けるように祭りは終わったけれど、いろいろな成果と反省点を総まとめにして、来年に活かせるよう引き継ぎたい。そういう意味で、大学祭には終わりが無い。こう確信している。



NO SMOKING CAMPUS

岩手県立大学は
平成20年度から敷地内全面禁煙



カラダをタバコの害から守るとともに健康的な学内環境を整えるため、平成20年度より、建物内・敷地内を全面禁煙とします。
学外からお越しの皆様も禁煙にご協力願います。

編集後記

前号から講座やゼミにスポットを当てた「創る学び」を連載しています。本学がどのような教育活動をして、それが、どのように人材育成に繋がっているのかを紹介していく企画です。そして、その教育活動を担っている教員を紹介する「教育研究者総覧」(<http://souran.iwate-pu.ac.jp/uedb/outside/openmain.jsp>)の運用を開始しました。本学の教員の授業や研究テーマ等をデータベース化したものです。ぜひご利用ください。(斎藤)

IPU・36

発行/2007年12月28日

公立大学法人

岩手県立大学

経営企画室

F 020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52

TEL/019-694-2005・FAX/019-694-2001

URL/<http://www.iwate-pu.ac.jp/> e-mail/management@ml.iwate-pu.ac.jp

グランプリの笑顔

IPU-Festa-Model [fesmo]は、こんな人

- ①応募の動機 ②一生懸命なこと ③IPU観 ④テーマもしくは進路 ⑤PR活動への抱負



尾無 徹 [おなし・ととる]
 ①みんなで楽しんで雰囲気を盛り上げるため。
 ②レゲエ音楽のバンド活動、看護学の勉強。
 ③ココロで分かり合える人が、いっぱい。
 ④郷里の久慈市で保健師の仕事に就く。
 ⑤ナチュラルな笑顔を見せたい。



佐藤 文美 [さとう・ともみ]
 ①内面的な、あたらしい一面を見つけたくて。
 ②さまざまな地域環境を知るフィールドワーク。
 ③主体性を、最大限に尊重してくれる気風。
 ④環境教育の実践について理解を深めよう。
 ⑤夢を叶える学生像を伝えたい。

大学祭の中で開催されたIPU-Festa-Model本選は、開学10周年記念イベントの一つ。IPUらしさを競って、予選を通過した男女3名ずつの学生がエントリー。大学に寄せる思いを表現したり、自己アピールを交えて将来の希望を話したり、存在感と華を競い合いました。

10周年へのカウントダウン

PR看板のお披露目です

深まる秋に恒例の、IPU Festa。そのオープニングに先立って10月27日、開学10周年をPRする看板の除幕が行われました。大学祭や学生会活動に携わる学生有志、さらに多くの教職員が見つめる中、掛け声に合わせて学長らがロープを引くと、拍手と歓声が沸きました。場所は正門の手前、やや東寄り。背景に芝地や木立、姫神山を望むスポットです。



未来の森を思い描こう

〈開学10周年記念植樹に向けて〉
 川前保育園の年中クラス、19名がドンクリ(コナラの実)拾いに訪れました(10月22日)。場所はキャンパスの北、森林公園との境の木の下の下です。足もとには、湿り気を帯びて黒々とした腐葉土が広がっています。そこに落ちたドンクリを拾い集めて一合った、ひと時でした。



粒ずつ、ポットに植えていきました。冬を乗り切ると、ドンクリは苗木にまで成長する見込みです。それらは来年度の開学記念日(6月19日)ごろ、やはり8ヶ月経って大きくなった、同じ子どもたちによって敷地の東縁部へ植えられます。記念植樹を経て幼木が成長した姿を見せるのは、数十年も先のこと。次代へ向け、森を育む気持ちを分かち合うことの大切さを確かめたい。

宮古短期大学部で記念シンポジウム

テーマは「沿岸地域の内発的発展とその課題」。あらかじめ提示された論点は、より主体的に地域の発展を図るために私たちが「何を成すべきか」「何ができるか」。熊坂義裕(宮古市長)、柳野善義(ICS社長)、山本正徳(歯科医師)の各氏と植田真弘・学部長がパネリストになり、宮井久男・経営情報学科長がコーディネーターを務めました(10月27日・大講義室)。建設的な意見交換を経て明らかになったのは、地域づくりにおいて住民参加と人材育成が欠かせない点です。また、さまざまな地域資源の活用に向け、リーダーシップを発揮できる女性の参画を促すことの大切さ、さらに人材のネットワーク化が急務とする意見も大きな賛同を得ました。



初めての、秋の入学式

中国と韓国から迎えた留学生、特別聴講学生

「第二の故郷へ帰ってきたような、懐かしい気持ちです。以前に特別聴講学生として親しんだ環境で心機一転、充実した研究生生活を過ごしたい」
 こう話すのは、ソフトウェア情報学研究科・博士前期課程に在籍する周寧寧さん。大連交通大学(中国)の出身で、この秋、本学が初めて実施した秋季入学の受け入れ態勢を整える一環として、秋の入学式が行われたのは10月2日。ソフトウェア情報学研究科博士前期課程に、4名のフレッシュな顔ぶれが加わりました。
 また、1年間滞在中の特別聴講学生9名の入学式も併せて行われています。このうち韓国の又松(ウソン)大学からは社会福祉学部1名



ソフトウェア情報学部3名。交流協定を締結している各校とのリレーションが深まるなど、キャンパスの国際化が進んでいます。

教育・学術での輝きを称えます

平成19年度 名誉教授の称号を授与

それぞれの知見と専門性を活かして本学の教育・学術に貢献した功績を称え、名誉教授の称号が授与されました(11月6日)。セレモニーの後、出席者は、しばし歓談の時を過ごして思い出や近況などを語り合いました。今回の顔ぶれは、下記の通りです。



太田原 功 [電子工学] ●副学長 宮古短期大学部学長



横田 碧 [看護管理学] ●看護学部 教授



兼松 百合子 [基礎看護学] ●看護学部 教授



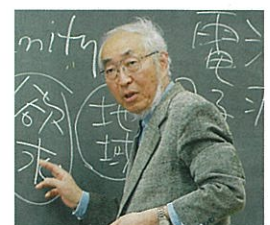
石井 トク [母性看護学] ●看護学部 教授



坪山 美智子 [地域看護学] ●看護学部 教授



高澤 武史 [福祉システム論] ●社会福祉学部 教授



菊池 章夫 [社会心理学] ●社会福祉学部 教授



高橋 富士雄 [食品学] ●盛岡短期大学部 教授

留学生サロン

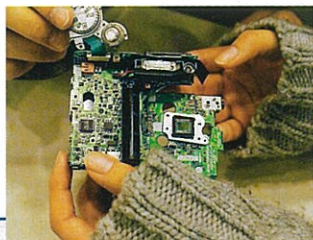


盧 正守 ジョンスン 社会福祉学部 特別聴講学生

ひろがっていく、僕の福祉観。
 日本語のレッスンと並行しながら、この国の福祉事情への理解を深めています。社会保障ボランティア、国際福祉社、といったキーワードに端を発して実情を把握する。こうして日韓の比較にとどまらず、やがて就く福祉職へのイメージを広げています。

「いちばん興味があるのは、高齢者施設の運営について。利用者の主体性や選択権がどう保たれて運用されているのか。現場を見てみたいのです」
 又松大学4年生で、交換留学制度を利用して来日。音楽などカルチャーの話題を通して、たくさん友人を作りた。好きなハンガルの単語は「ガンサハムニダ(ありがとうございます)」とのこと。

創る学び



「現場」という
活きた教材を求めて
2つのゼミが向かったのは、
地域に根ざす
電子パーツ製造業。
その元気の源を知るために。



宮古短期大学部 経営情報学科「植田ゼミ×松石ゼミ」
モノづくりの活気。
沿岸の、産業事情の一端に触れる。

ここは、コネクタの工場

説明に聞き入り、うなずいていた学生へ完成品の見本が差し出された。「うわあ、こんなに小さくて軽いんだ。これがケータイに組み込まれるんだ」めいめい食い入るように見入っていたのは、コネクタと呼ばれる電子パーツだ。その名の通り、モノとモノを接続する機能を持つ。たとえば携帯電話の液晶ディスプレイと内部構造との連動をつかさどる、というように。

宮古から世界市場へ

東京、大阪に次いで国内3位の出荷額に達する岩手のコネクタ産業。その3分の2が宮古ならびに周辺地域で生産される。世界市場をも指向する製造拠点が、現場に根ざしている。

モノづくりの活気とポテンシャルを感じてもらおうと、(株)エフビー「山田町豊間根」が工場見学を受け入れた。11月12日の15時から約1時間半、2年生16名をガイドした。同行したのは植田眞弘学部長、松石泰彦准教授。2つのゼミが合同の企画である。

それぞれの視点と方法で

両ゼミの特徴は同じ現場と向き合う際の着眼点、関心が向かってゆく対象、アプローチ法の違いなどに現れる。

植田ゼミには企業論、経営学を専攻する学生が集う。金型の設計と加工に始まって成形・プレス・組み立て、といった工程が連係する生産システム。これらと呼応する工程管理、品質管理、多様なニーズやマーケットの動向に因應する研究開発。どれも興味深い。

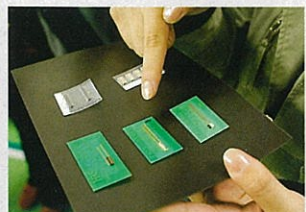
松石ゼミの学生は地域の産業史、産業構造を捉える視点でコネクタ製造の現場と接した。なぜ宮古地域へ集積が進んでいるか、と疑問を呈する学生が多かった。300人規模の事業所がもたらす経済効果は大きく、貴重な就業の場である点も確かめられた。

関心の枝葉を広げる

モノづくりの今を知ること。それは、変わりゆく経済社会をリアルに体感する貴重なケーススタディーだった。1000分の1ミリ単位の微細加工に、携わる人の情熱と技能が感じられた。



携帯電話に用いるコネクタは、世界市場の拡大とともに供給量が増加。つまり、国際的な分業を地元企業が担っている。「品質向上への取り組み、研究開発の様子、さらに環境への配慮を知りたい」という声も聞かれた。知り得たことを、情報のストックに。あるいは、見聞を広めて思考した内容を卒業論文に活かす。学生は、さまざまな方法で成果を残そうとしている。



追いつきの時が来た

4年次後期の「専門演習Ⅳ」は卒業研究に直結する。提出期限は1月半ば。11月22日には経営・経済系のゼミが集まって、中間報告会が開かれた。

「データの羅列ではなく、グラフで視覚に訴えるのが効果的だね。話すことに関しては、専門用語を汎用的な言い回しに変える工夫が欲しいよね。なぜ、何を、どのように、という点が明確ならプロットは万全に近い。とにかく、やんなくちゃ。みんながんばって！」

笑顔です、真摯な顔です

誰かが言葉を発すれば、すぐさま誰かが元気に応える。こんな明るいノリ、風通しの良さは家族的なゼミだからこそ。ティー准教授（経済統計学・ファイナンス）の指導を3年次から受けてきたのは小野蘭さん、遠藤優さん、そして長山和歌子さん。2005年に本



総合政策学部 行政・経営コース
「ティー・キャン・ヘーン准教授と、3名のゼミ生」
気温との連関で探る、
天候デリバティブの地域ニーズ。

学へ着任したティー准教授が、初めて送り出す卒業生となるはずだ。

リスクをヘッジ(回避)する

概論の把握、基礎文献の講読、商品の傾向チェック。こうした入門篇でスタートした研究の対象は「天候デリバティブ」という金融派生商品である。

さまざまな天候要因に左右されやすい業種・業態が収益の減少をカバーする、ひいては天候リスクをコントロールして利益の平準化を図る……こうしたニーズを捉え、損保各社がシェアを競う。中小企業を対象とする小口契約の選択肢も増えた。わが国の市場規模(補償額)は600億円に達する。

たとえば気温が、ある特定の指標を上回った(下回った)場合、あらかじめ決めた補償額が、損害の有無に関わらず支

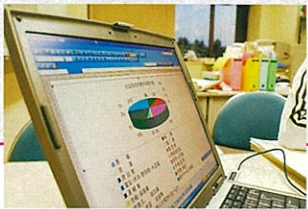
払われる。冬物衣料を売る店が、暖冬への備えとして。あるいは、ビール会社が冷夏への備えとして。それは、掛け捨て保険の性質も帯びている。

数理的なアプローチ

気温に特化し、各地の産業統計との連関を確かめたい。さらに実証分析を踏まえて天候デリバティブのローカルなニーズを探ったり、ケース別の商品をシミュレーションしたりする。これが、ゼミ生に共通するテーマ意識だ。

何十年かの気象統計を調べ、特定地域の気温の推移を把握する。そうしたデータを時系列的な産業統計にオーバラップさせると、不可分の結びつきが見えてくる。寒い、長雨だ、という夏は第1次産業、レジャー関連の被るダメージが大きい、という傾向が浮かび上がってくる。

地域の実相を、重層的に理解する手立ての一つ。天候デリバティブの研究は、こもも位置づけられる。「勉強が進むほど、身近な地域の天気予報やニュースへの反応が鋭くなった」との声も。数理的な手法を用いてデータを集約、それらの意味と背景を読み解けば、より細分化した市場性も考察できる。



胸の奥へ、レスキューを差し伸べること。

看護学部／教授 伊藤 収



千葉大学看護学部の1回生である。その後は精神医療に20年ほど携わり、臨床現場を経て、後進の育成ならびに学術研究の道歩んできた。前任校で教授を務める一方、尊敬する横田碧先生に師事したいの思いから、本学の看護学研究科・博士後期課程にさらなる学びを求めた。

「横田先生の看護相談技術学を継承し、死と日常的に関わる立場の看護専門職の重さを支える。そういう学に発展させたいと考えています。看護の対象となる人の「死にたい」という気持ちを留まらせ、「死にたくない」という心情にも寄り添える学を。もちろん、障害者の方へも手を差し伸べられる学を……」

救われるべき人を救い、守られるべき人を守りたい。こう立脚点を定める伊藤先生は、地域事情や世相にも目を凝らしながら看護学の新たな展開を指向する。すなわち障害者の自立、社会復帰が促されるように。あるいは、無理解による偏見や差別が解消されるように。自殺予防の観点でも、有効な手立てを根づかせたいと強く願う。

学部ならびに大学院では看護管理・マネジメントに関する科目を多く受け持つ。「現役の看護師で、ステップアップを望む皆さんにも門戸は開かれています。どしどし機会を求め、高みを目指していきましょう」

人間という存在、幸福論にまつわる関連な言葉のやり取りが期待できる。生きる意味すこやかな内面の本質を語り出すと、伊藤先生は堅い話も柔らかく説いてくれる。心酔する開高健ら、文壇に足跡を残した作家の美学と行動も例に挙げて看護観、人間観は果てしない。

いとう おさむ

看護管理学・精神看護学が専門領域。久留米大学医学部看護学科、昭和大学保健医療学部、そして山梨県立大学を経て2007年4月から現職。博士（臨床看護学／岩手県立大学）。著書は「事例で学ぶ精神看護学」（メヂカルフレンド社）、「精神看護エクスプレス」（中山書店）ほか。看護職者の育成、看護の方法論に関する論考も多い。

サークルで元気づけよう

音楽部 歌で思いを届けよう



「合唱やりたいな」という呼びかけに応じて「それじゃあサークル、つくろうか」。社会福祉学部2年の安部雄紀さん（代表）と大越澄香さんが意気投合、ことし5月に結成しました。

福祉施設・病院・養護学校を訪問して優しい歌声を届けるほか、コンクールへのエントリー、学内行事への参加など活動は広がります。童謡、アニメソング、さらに学生歌「風のモンジ」がレパートリーを飾ります。

テナー・バリトン・バスといった音域を担う男子メンバーも募集中です。合同のレッスンは水曜日の16:10から3時間ほど、社会福祉学部棟のプレイルームにて。



講師に迎えた小倉和夫氏＝独立行政法人・国際交流基金/理事長

「学の世界入門」の公開授業と国際的責任。入門演習「学の世界入門」（1年次の一環として、公開授業が行われました（12月5日）。講師は外務省の要職、在フランス大使などを歴任してきた小倉和夫氏（独立行政法人国際交流基金/理事長）です。

まず「事実即して状況を捉えよう」と社会科学の視点を提示。貿易・経済指標、政治・社会意識の調査データを示した後、相互依存の深化とそれにも拘わらず存在する歴史認識のギャップ、さらに国ごとの精神風土や価値観の違いが示されました。これらを踏まえ、わが国の進むべき道、国際協調へ果たす役割が示唆的に述べられています。



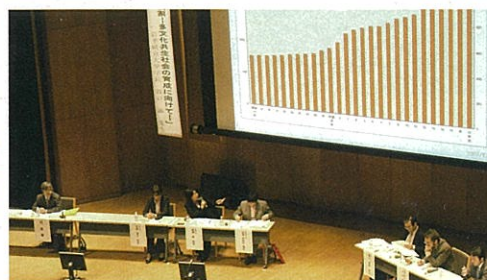
地域での協働と実践めざす マインドを

多文化共生社会の大学像とは

12月8日、盛岡短期大学部が「特色GPフォーラム」を開催しました。この集いは、国際文化学科が推進する人材育成と密接に結びついています。地域・海外の文化領域を並行的に関連づけて学ぶ「自己の文化理解を柱とした国際文化教育」。実践指向を深める一連の取り組みは、平成18年度・特色ある大学教育支援プログラム（特色GP/文部科学省）に採択されました。こうした高い評価を踏まえ、より建設的なオピニオンを発信しようとするものです。

テーマは「多文化共生社会において大学が果たすべき役割」。さまざまな分野へグローバル化の潮流が及ぶ昨今、国籍や民族の違いを超えて地域づくりを図ること、変容する社会をリードする人材の育成が急務とされています。このような目的意識を共有する大学人がキャンパスや現場での活動ぶりを語り、より効果的な方法論を巡って意見を交えました。

「外国人への対応に限らず、すべての人にとって、より良い環境を築くこと。それが多文化共生の本質です。どんな社会を創るのか、ほかならぬ日本人の問題としても捉えるべきです」（群馬大学教育学部・結城恵准教授）



地域言語は文化である、生き物である。

宮古短期大学部／准教授 田中 宣廣



「文学が創作の所産なら、言語とは、それぞれの土地に暮らす人たちが日常の営みで用いる道具なのです。そこには固有の歴史、地域性、風土と不可分の生活様式、さらにメンタリティーなどが反映されます」

言語科学であり、また社会科学の要素も帯びた地域言語の研究は、田中先生のライフワークだ。信州の大町・東京・京都・鹿児島、そして宮古で。日本語のアクセント構造を代表する五つの方言を対象に、フィールド調査を行ってきた。まず、情熱を注ぐ研究課題との出会いに恵まれた。たびたび現地へ赴き、はえぬぎの話者が発する言葉を取り。データをパズル的に解き、オリジナルの方法で規則性など細部を明らかにする。視座を統一して、五つの方言と向き合った学術的な意義も大きい。

こうして著したのは「付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造」（平成17年10月「おうふう」より刊行）。言語学・民俗学の分野での最高権威「金田一京助博士記念賞（第34回）」に輝いた力作だ。

日本語学の奥行きへ関心を寄せ、卒業を控えたゼミ生は10人。テーマ意識に応じてキメ細かな個別指導に努めるが「あくまでも本人の意思と主体性を引き出そう」と、アドバイスのポイントを見極めている。

たなか のぶひろ
東京都立大学大学院人文科学研究科・修士課程、東北大学大学院文学研究科・博士課程（言語科学専攻）を修了。博士（文学）。専門は日本語学。宮古短期大学の講師を経て、2004年より助教授。そして現職へ至る。担当科目は「日本語の現状」「現代日本語の形成」ほか。日本語学会、東京言語調査研究会（事務局長）に所属。

「経営学や情報科学を勉強しながら、それらとは異なる分野へも意欲を示す学生に励まされる思いです。さまざまな特徴を持つ地域言語は、ながい歳月を経て培われてきた文化に他なりません。敬意を払い、しっかりと使って後世へ引き継ぐ。その意義に目覚めてくれると嬉しいですね」

職場訪問

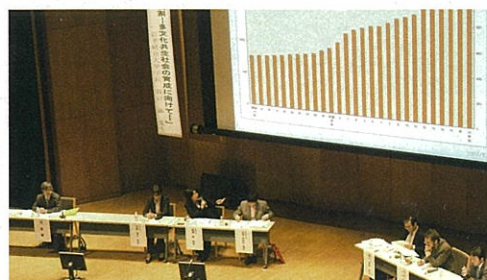


メディアセンター 図書グループ

蔵書は、およそ21万冊。多彩なジャンルの専門書ほか書籍・新書などの充実を図り、貸し出し業務やレファレンスサービスを行います。さらにテーマ性を帯びた選書フェアの開催、国内外を問わず各種メディアのWeb版や映像資料の導入も。スタッフが、情報とコンテンツへの幅広いニーズに応えます。

「時代の旬の要素を、どのように取り込んで提供するか、あれこれ工夫を重ねています。学外の方も含め、より多くの人に利用していただきたいと思っています」（福田隆主査）

メディアセンター
■ご利用案内
●月曜日から金曜日/9:00~21:00
●土曜日/9:00~17:00
※休館日は日曜日・祝日・月末・年末年始



主張。それぞれの、まなざし。

盛岡短期大学部
生活科学科「生活科学専攻」2年生

ふだん着のエコが、いい。

遠藤 翔太

生活者の環境意識は、どこまで進んでいるんだろう。レジ袋に替わる、マイバッグ。その活用ぶりを通して日常的な省エネ・省資源の方法とメリットを考えてみる。



買い物の時、マイバッグを持参する人が増えた。ポリエチレンなどで造るレジ袋の使用を控えるのは、もともと原料・石油資源のムダ遣いを避け、回り回って二酸化炭素の排出抑制など、地球温暖化を防ぐ手立ての一つだ。かけがえのない環境を思いやり、できることから取り組む。こういう考え方に賛成だ。ところで実際は、どうなのか。ふとした疑問に駆られ、卒業研究でマイバッグの使われ方を取り上げることにした。



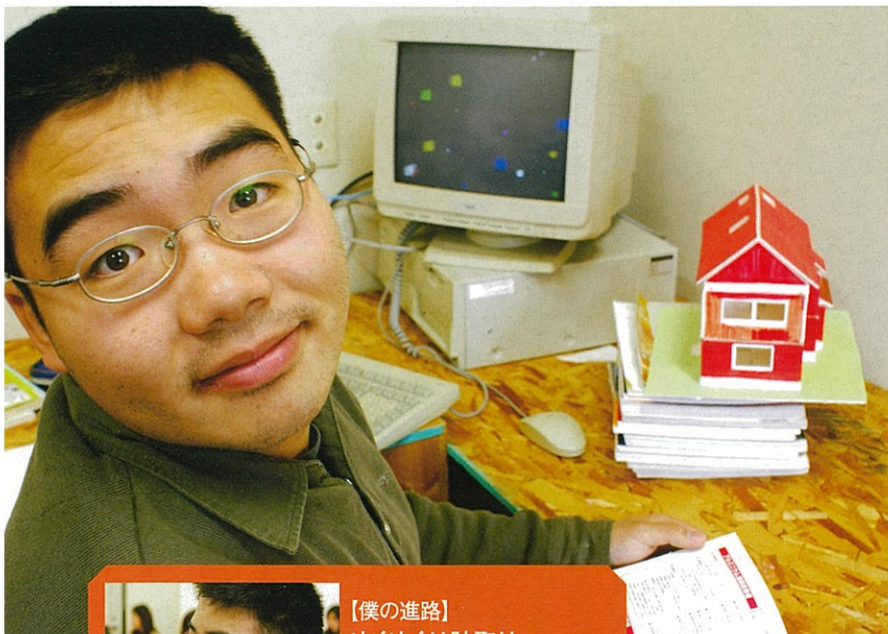
【僕の進路】
あらかじめ期間を定め、はたらいで資金を貯めて、世界の旅へ。

ほんとうの自分と会える。

伊藤 高貴

2年間の意味は、人それぞれ。「もりたん」で学ぶイメージを描いてみるのが大事です。しっかりと進路も決めなくちゃ。次のステップへ向け、自分を甘やかせられないぞ。

「知識の広がり」と命名されたメニューメントが短大棟の前にある。無限大を表す∞ほか、さまざまなインターネットリソースや学問要素を意味する記号が彫り込まれ、向学心に働きかける。どれか特定の分野に偏らないで関心を深めたり、学びの枝葉を広げたりする充実感を短大生活で味わえる。衣と食と住。暮らしに欠かせない3大要素を関連づけて理解できる「生活科学概論」が入門篇。この科目に触発され、僕は住居系の勉強に打ち込んできた。実験・演習に現場見学などで理論との関連性がリアルに分かった。知力のトレーニングに加え、ゆたかな人間性を培う機会も多い。僕にとっての「もりたん」は、これからへの意思を固める場でもある。



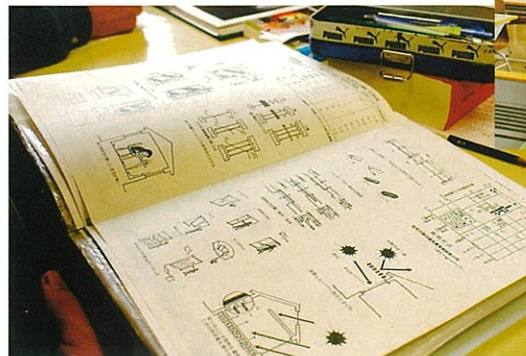
【僕の進路】
ゆくゆくは跡取り。地元に残り家業に就いて、両親を安心させる。



「つながり」と「広がり」だ。

畠山 和真

興味を感じること、面白そうなことに一生懸命。そこから、ふだんの勉強に奥行きと、広がりが見られる。いろいろな考えを柔軟に取り入れていきたいな。



【僕の進路】
総合政策学部の「環境・地域コース」へ編入し、都市計画を学ぶ。

高校で、福祉住環境コーディネータの資格(3級)を取った。ユニバーサルデザインが象徴するように、誰にでも快適な場を整えることは、すこやかな心身の維持という観点で大切な。住む人の事情、気持ちに応えられる建築への興味湧いて進学を決めた。

おぼえたこと、知っていることに「つながり」を持たせて体系的な理解を自分の糧にしている。オリジナルの視点に加わると、ますます面白い。どんどん先へ進みたくなる。関連する分野へアプローチしたり、認識を異にする人の意見を聞いたりするのも有意義だ。たんなる点としての住居ではなく、それを取り巻く環境のあり方にも関心が向いてきた。そう、これからの僕のテーマは「もっと広く！」。



地域や産業を動かす エンジンたれ。

滝沢村長
柳村 典秀

実学・実践の、さらなる進化を

社会情勢が刻々と変化する時代の中、学生の皆さんには専門的な知識や技術に加え、コミュニケーション能力や柔軟性といったスキルの習得が求められています。昨今は、あらゆる業種・職種で即戦力が重視されており、こうした産業界のニーズに応え得る人材の育成は、最重要課題と言えるのではないでしょうか。

岩手県立大学は来年度で開学10周年を迎えますが、実学・実践をベースとする、これまでの教育研究の成果は全国的にも高い評価を得ており、地域に根ざす一連の取り組みが実を結んでいると思われれます。高度な専門知識・技術の習得にとどまらず、ゆたかな感性と創造力を兼ね備えた人材が諸分野で活躍しているのは、喜ばしい限りです。

ビジョンと成果は共有される

滝沢村は、岩手県立大学との緊密なパートナーシップを築いてきました。ラーニング・サポーター・プロジェクト事業ほか、さまざまな機会での連携と協働が深まっています。

産学官の結びつきは手段であって、目的ではありません。プロジェクトや共同研究で生み出されるネットワークや成果こそが新しい価値へ結実し、地域のより良い発展を導いていきます。産・学・官それぞれの役割と位置づけを明確化するとともに、認識を深めてビジョンを共有したいものです。

地域社会のニーズを鋭敏に捉えて実現するとともに、大学の活性化にも資するイノベーションを図るため、滝沢村は新たな産学官連携を指向します。すなわち、次世代型産業の育成に向けて積極的な取り組みを展開します。

知財を活かしてIT産業の集積

滝沢村が設置事業主体となり、大学の敷地内に「仮

検索性が高まるように、との要望もよせられる。「私なら、こういうふうに考えます」と、アウトラインを主体的に示すのが信頼への足がかりだ。



して学問の成果は活かしているか、との自問自答も脳裏から消えない。

そんな毎日を通すうち「いつもフレッシュな気持ちで」という意識が強まってきた。現在のスタンズ、役割を自覚する一方でステップアップも視野に入れ、まちづくりの課題や方向性を幅広い観点で捉える姿勢を絶やさない。これが、モチベーションを高める何よりの方法だ。

アクションで何かが変わる、と未来を感じて在学中に立ち上げたのは、環境問題に取り組む自主ゼミ「Greenish(グリッシン)」。より良い地域をめざして住民が企業、行政との連携を図る輪にも飛び込んだ。いろいろな立場を越え、想いを共有する人が手を携えて現場を動かす。こうして市民参加の在り方と方法への関心を深めたのが、高橋さんの原点だった。

進路に寄せた思い、目的意識を突き詰めると「生まれ育った地域のために役立ちたい。市民の声に向き合いながら、大学で専攻した地方自治論や政策法務を、さまざまな現場で活かしてみたい。」初めての配属先は、一人ひとりの生活の根幹と直結する。国民健康保険税の額を計算し、加入世帯へ通知する賦課係。ケースバイケースの対応にも努め、しっかりと納得してもらえようという心を決め、「与えられたことを、キチンとこなすのは当たり前です。目標は高く、どんどんプラスアルファを生み出せるよう、いつも新鮮な気持ちで勉強を積み重ねていこう」と、新しい発見を積み重ねてきた。

漠然とした動機で公務員を志すのではなく、ひとすべら盛岡市の職員になりたくて希望を叶えた。



一歩ずつ前。あしたは今日より新しい。

盛岡市市民部 国保年金課
高橋 知芳さん
総合政策学部 行政・経営コース [平成19年3月卒]

ソリューションへ、お客様と協働です。

(株)東北地域経済開発研究所
高田 優香さん
ソフトウェア情報学部 [平成19年3月卒]

入社早々のこと。4月から7月末まで、東京を拠点にIT営業の実践スキルを鍛えてきた。研修先は、大手通信事業者の法人担当部門である。いきなりの見知らぬ世界。時には、関西へも足を延ばした。たとえばメーカーのセキュリティ管理システムを提案、契約へ結びつけるというように、かなり具体的な案件と現場に携われるのが刺激的だった。

担当エリアは盛岡市ほか、岩手県内一円に及んで

いる。資料を作成してプレゼンテーションに臨んだり、受注案件に関しては打ち合わせ・段取りを進めたり。絞り込まれたニーズに対して何社かが企画・提案を競い合う、コンペに参加することも。アイデアを巡らす時、高田さんは学生時代を思い出す。「システムは易しくあるべし。現場で役立つこそ価値がある」と研究室で教わった。菅原光政教授らのシステム観、開発ポリシーは「どのようにして使う人の思いに添えるか」という一点に集約された。学童保育所との協働で、有意義だった卒業研究。閲覧も更新も簡単なホームページを作成して、とても喜ばれた。こうした延長線上に今がある。

販売促進に向け、Webサイトの活用を図るケースが増えた。アクセス頻度